

機関番号：44522

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2009～2010

課題番号：21830171

研究課題名（和文） 幼児の生活技術の獲得を援助できる保育者育成のための総合的調査研究

研究課題名（英文） A study for training a nursery teacher who can support young children acquiring life skills

研究代表者

大和 晴行（YAMATO HARUYUKI）

湊川短期大学・幼児教育保育学科・講師

研究者番号：70522382

研究成果の概要（和文）：保育者志望学生の生活技術の実態把握，課題の検討を行った上で，正しい生活技術の獲得を目的とした実践を開発，展開し，その効果の検討を行った。結果，保育者志望学生は箸を使う，鉛筆を使うことに関する技術レベルが低いことが示された。そこで，学生同士の教え合いによる実践を展開し，実践前後の技術レベルを比較検討したところ，取り上げた全ての生活技術項目で実践後，有意に技術レベルが向上したことが確認された。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to examine the current states and the problem of life skills in the course of nursery teacher, to carry out practice for acquiring life skills, and to examine the effect. As a result, The student's level of the life skills about use of chopsticks and a pencil was low. Therefore, when teaching how to use chopsticks and a pencil by students mutually, the level of life skills improved after practice.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	860,000	258,000	1,118,000
2010 年度	470,000	141,000	611,000
年度			
年度			
年度			
総計	1330,000	399,000	1,729,000

研究分野：教育学

科研費の分科・細目：社会科学・教育学

キーワード：生活技術 保育者養成 実技調査 実践

## 1. 研究開始当初の背景

箸を使う，鉛筆を使うといった生活技術に関して，1900 年代前半の日本では幼児期に正しい持ち方が身につけており，高い技術レベルに達していたことが牛島（1960）の標準化した幼児の生活能力から窺うことが出来る。

しかし，その後の生活の機械化や利便化などに伴い，正しい生活技術が身につけていない幼児が多く，伝統的な生活技術の衰退が指摘されて久しい。

谷田貝ら（2000）は 1985 年と 1999 年の

二度にわたって，“箸を使う”，“鉛筆を使う”，“タオルを絞る”など 12 項目の生活動作の実技調査を行った結果，12 項目中 9 項目で正しい持ち方，正しいやり方が出来る幼児が 1 割に満たないことを報告している。また，大和・嶋崎（2008）が谷田貝らの研究を参考に，2005 年に幼児に対する生活技術調査を行った結果，谷田貝らの結果と同様に技術レベルが低い水準で推移してきていることを報告している。加えて大和・嶋崎はこうした生活技術レベルの低下が，単に伝統文化の衰退を示すものでなく，身体学習機会の減少による

動作のぎこちなさや身体感覚の脆弱化につながっていることを実技調査時の動作観察から指摘している。

このように生活技術の衰退が続く中、幼児に生活技術を教授する大人側の技術レベルについても焦点を当てた研究が展開されている。村越・谷田貝ら(1990)は保護者の生活技術レベルと子どもの生活技術レベルとの関連性を検討し、箸の持ち方など親が正しい持ち方をしている子どもほど正しい持ち方が身につけており、大人が正しい生活技術を身につけておくことの重要性を指摘している。しかし、谷田貝ら(1998)が実施した大規模な実技調査の結果、保護者世代、保育者、教員志望の学生の半数近くが間違った箸の持ち方をしているなど、多くの項目で生活技術レベルが低い水準にあり、幼児を取り巻く大人がモデルに成り得ない状況にあることを指摘している。

このように、これまで幼児に正しい生活技術が身につくかどうかは、保育者など大人側の技術レベルが重要な要因とされてきた。しかし、先行研究は技術レベルのみを取り上げてきたために、結果として大人のモデル機能の低下を指摘するに留まっている。大和(2009)は保育者志望の学生に対する調査から、生活技術の中でもこのぎりの使い方や、花結びの仕方などは技術レベルが高く、その教授期間が幼児期から児童期以降までと長いことや教授にかかわる大人が多いことが特徴であったと報告している。このように、実際、子どもが技術を身につける過程では、教授された期間、教授にかかわった人的環境や教授方法なども正しい技術を身につけて行く上で重要な要因になると考えられるが、これまでそうした獲得過程が技術獲得にどの程度重要であるかは先述の大和の研究を除いては検討されていない。また、現在まで多くの生活技術の実態把握が実施されてきているが、実際に生活技術レベルの向上を目指した実践報告等は少なく、こうした現状を打開する実践の開発が必要と考えられる。

## 2. 研究の目的

本研究は、保育者志望学生を対象に取り上げ、実技調査から生活技術レベルを把握していく。加えて、質問紙調査から獲得過程を把握し、技術レベルと獲得過程の関連性を検討することで、正しい生活技術を身につけるために留意すべき点を明らかにする。次に、そうして得られた点を踏まえ、保育者志望の学生に対し、生活技術の正しい型の習得を目標とした実践を開発、展開し、その効果の検討を行うことを目的とした。

## 3. 研究の方法

### (1) 生活技術レベル実態調査

保育者志望学生を対象に生活技術レベル実態把握のための実技調査を実施した。①箸を使う、②鉛筆を使う、③雑巾を絞る、④のこぎりで板を切る、⑤紐を前後で花結びするの5項目を取り上げた。判定は、調査者1名の前で調査協力者が①箸を使う～⑤紐を前後で花結びするの順に実演し、その様子をビデオで撮影した。調査後、以下の判定基準(a)～(c)に従い評価した。

#### ①箸を使う

(a) 伝統的な持ち方が出来る、(b) 一見伝統的な持ち方だが指(特に中指)の使い方が異なる、(c) 独自の持ち方をして使う。

#### ②鉛筆を使う

(a) 正しく持って使える、(b) 一見正しい持ち方だが、人差し指または親指に力が入り曲がる。または親指が人差し指より先に出る、(c) a, b 以外。

#### ③雑巾を絞る

(a) 雑巾を逆手でねじって絞る、(b) 雑巾を順手でねじって絞る、(c) a, b 以外。

#### ④のこぎりで板を切る(2分間)

(a) 線からはみ出さないで切り落とすことができる、(b) 線からはみ出している、(c) 切り落とすことができない。

#### ⑤紐を前後で花結びにする(30秒間)

(a) 正しく結べる、(b) 縦結びになる、(c) その他の結び方、あるいは結べない。

### (2) 質問紙による生活技術習得過程の把握

①箸を使う～⑤紐を前後で花結びするのそれぞれについて、幼児期を振り返り、技術教授してもらった人物及び教授方法について尋ねた。

### (3) 実践の概要

(1) 及び(2)の結果を踏まえ、実践には①箸を使う、②鉛筆を使う、③雑巾を絞るの3項目を取り上げた。また、実践内容について正しい型の習得の際、「型づけ」を積極的に実施することが必要であること、加えて保育者志望学生に対しては、他者に教授する経験や幼児への教授意欲を同時に高めるよう

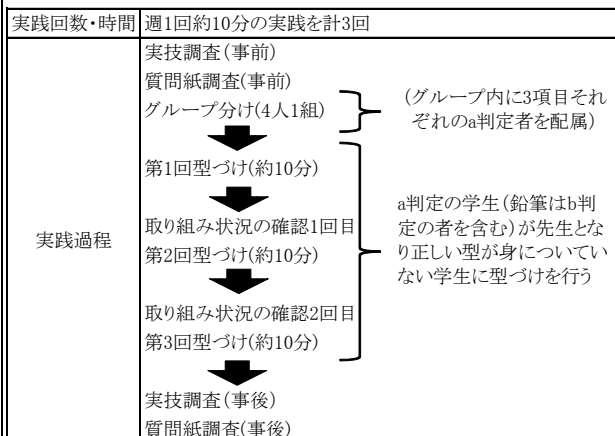


図1 実践の概要

な取り組みが必要と考えられたため、学生同士の「教える－教えられる」関係を軸に、型づけを行うことを実践内容の柱とし、図1に示す実践を行った。なお、実践は筆者の担当する授業内で実施した。

#### 4. 研究成果

##### (1) 生活技術レベルの実態

実技調査の結果、正しい型を習得しているa判定の者は、①箸を使うのでは24.8%、②鉛筆を使うでは15.2%、③雑巾を絞るでは37.6%、④のこぎりで板を切るでは56.0%、⑤紐を前後で花結びにするでは前が81.6%、後ろが76.8%であった。

このように①箸を使うや②鉛筆を使うといった日常生活で頻度の高い技術ではa判定の者が3割を下回った。特に②鉛筆を使うでは、c判定の独自の使い方をしている学生が約半数を占めるなど、保育者志望学生の生活技術レベルの低さが窺えた。唯一、自立基準といわれる7割を越えた項目は⑤花結びをするのみであった。

##### (2) 教授人物及び教授方法について

幼児期における教授人物の指摘割合について、技術レベルにより指摘割合に差があるか検討するため $\chi^2$ 検定を行った。結果、日常生活で頻繁に使用する①箸を使うでは、「母親」の指摘割合に有意差が認められ( $\chi^2(2) = 15.71, p < .001$ )、Ryan法による多重比較を行ったところ、c判定の者に比べa判定、b判定の者は母親に教授された記憶を有する者が多かった。③雑巾を絞るでは、「保育者」の指摘割合に有意差が認められ( $\chi^2(1) = 4.50, p < .05$ )、b判定の者はa判定の者に比べ保育者に教授された記憶を有する者が多かった。また、⑤花結びをするでも「保育者」の指摘割合に有意差が認められ( $\chi^2(1) = 4.71, p < .05$ )、a判定の者はb判定の者に比べ、保育者に教授された記憶を有する者が多かった。

次に、教授方法の指摘割合について検討を行った。結果、5つの生活技術全てで、「見本を見せてもらった」の指摘が最も多く、大人自身がモデルとなる方法が多く取られていることが確認された。次に技術レベルにより指摘割合に差があるか検討するため $\chi^2$ 検定を行った。結果、③雑巾を絞るでは「見本を見せてもらった」の指摘割合に有意差が認められ( $\chi^2(1) = 9.36, p < .01$ )、a判定の者がb判定の者より多かった。また、「まったく思い出せない」の指摘割合にも有意差が認められ( $\chi^2(1) = 11.82, p < .001$ )、b判定の者がa判定の者に比べ多かった。④のこぎりで板を切るでも「まったく思い出せない」は有意差が認められ( $\chi^2(2) = 9.44, p < .001$ )、Ryan法による多重比較を行ったところ、c判定の者がa判定の者に比べ多

かった。

このように、教授人物では5項目中2項目で保育者の関与が技術レベルに影響を及ぼすことが示された。幼児期の生活技術の教授は家庭を中心に進んでいく側面はあるが、幼児への影響力を考慮すると、保育者が正しい技術を身に付け、幼児への技術教授に積極的ににかかわることの重要性が示された。

また、教授方法については、5項目中2項目で、技術レベルの低い者ほど「まったく思い出せない」と回答する割合が高かった。こうした結果からは、大人の関与の少なさが技術レベルの低さにつながる可能性が推察された。加えて、5つの生活技術全てで、「見本を見せてもらった」の指摘が最も多いことが示されたが、具体的に「手を取って教えられた」、「コツを教えてもらった」といった技術の型付けに関する方法は指摘が少ない傾向にあった。技術獲得にはモデルを模倣することは重要なことであるが、同様に型付けがなされ、繰り返すことでそれが自動化することで技術は獲得される側面もあり、今後、生活技術レベルが向上していくためにはこうした型付けを重視していくことが重要と考えられた。

##### (3) 実践効果の検討

研究成果(1)及び(2)の結果を踏まえ、研究方法(3)に記した実践を展開した。実践前後における型の習得状況を表1に示した。いずれの項目においても有意な差が認められ、実践後にa判定の者が増加したことが確認された。ただし、箸を使う、雑巾を絞るでは実践後7割近くがa判定となったものの、鉛筆を使うは3割程度であった。

表1 実践前後の実技調査判定の結果

		実践前	実践後	実践前後の a判定比較
箸を使う	a判定	38.8(31)	65.0(52)	z=4.37***
	b判定	27.5(22)	25.0(20)	
	c判定	33.8(27)	10.0(8)	
鉛筆を使う	a判定	10.0(8)	30.0(24)	z=3.54***
	b判定	31.3(25)	35.0(28)	
	c判定	58.8(47)	35.0(28)	
雑巾を絞る	a判定	31.6(25)	72.2(57)	z=5.66***
	b判定	65.8(52)	26.6(21)	
	c判定	2.5(2)	1.3(1)	

注.( )内は人数

\*\*\*:p<0.001

続いて、実践期間中における授業外での取り組み状況について検討を行った。結果、箸を使うでは判定の主効果が認められ( $F(2,68)=20.04, p < .001$ )、多重比較の結果、a判定に比べb、c判定の者が実践期間中継続して積極的に取り組む状況が確認された。また、鉛筆を使うでは時期の主効果が認められ

( $F(1,68)=4.96, p<.05$ ), 判定レベルに関係なく、実践を経る毎に取り組み状況が積極的にようになっていく様子が確認された。雑巾を絞るでは主効果、交互作用共に認められず、取り組み状況の平均は他の2項目に比べ低い状況であった。

次に実践前後における幼児への教授意欲の状況について検討を行った。結果、箸を使う、鉛筆を使う共に主効果、交互作用は認められず、雑巾を絞るにのみ時期の主効果に有意傾向が認められた程度であった。箸を使う、鉛筆を使うの2項目に関しては技術レベルに関係なく、実践前から教授意欲が高い傾向にあることが確認された。

以上、実践を通して、箸を使うにおいて実践後 a 判定の者が7割弱に増加した。週1回10分間という短い時間設定の中でも、実践前から幼児への教授意欲が高かったため、型づけを主にした内容が効果的に働いたものと推察される。雑巾を絞るにおいては取り組み状況の平均は低い、実践後の a 判定が7割を超えていることから、短期間で比較的容易に習得できる型であったと考えられる。一方、鉛筆を使うにおいては、箸を使うと同様に実践前から高い幼児への教授意欲が見られたものの、実践後の a 判定は3割に留まった。実践後の実技調査の際、普段は c 判定の型だが、意識をすれば a 判定の型で書くことが出来る者が多く見られた。このことは型づけは出来ているが、それが自動化するに至っていないことを示すものと考えられる。また、本実践が短い時間で3つの動作の型づけを行ったこと、鉛筆を使うは取り組み状況が回を経る毎に徐々によくなる傾向にあったことを勘案すると、鉛筆の正しい型の習得には、3週間以上の期間が必要と考えられた。

このように本実践において、型づけを重視することで短期間の実践であっても一定の効果を得ることが出来た。比較的簡単に実施できる実践内容で効果が得られたことは意義あるものと考えられる。

今後の課題として、動作により型の定着期間には差があると考えられたため、それを踏まえた実践の再構築が必要である。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

①大和晴行, 保育者志望学生の生活技術の現状と獲得過程に関する研究, 幼年児童教育研究, 第23巻, 2011年, P.31-P.39

[学会発表] (計2件)

①大和晴行, 保育者志望学生の生活技術の現状-実技レベルと生活技術への認識-, 日本

保育学会第63回大会, 2010年5月23日, 松山東雲短期大学

②大和晴行, 保育者志望学生の生活技術の現状と獲得過程に関する研究, 日本幼少児健康教育学会第28回大会春季朝霞大会, 2010年3月20日, 東洋大学

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

大和 晴行 (YAMATO HARUYUKI)

湊川短期大学・幼児教育保育学科・講師

研究者番号: 70522382

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

なし